始葉護太子、前得罪死、故次子移地健立、號牟羽可汗、其妻僕固懷恩女也、始可汗爲少子請昏、帝以妻之、至是爲可敦

と記せり、此の如く新たに立てる可汗を前書は少子と記し登利可汗と號したりとし、後者は次子移地健と記し牟羽可汗と號したりとすれども、要するに兩書の記事が同一人を指せるものなること疑なし、何となれば新書には前には次子移地健と書き、後には同じ人を指して少子と呼び「爲少子請昏」と記せば、少子とも次子とも曰ひ得らるべき人なりしなるべきが、余輩の見る所を以てすれば、移地健なる語が實は少子の意味に外ならず、トルコ語中 Kara Kirghiz 語にては小を icka〔八八〕と曰ひ、又蒙古語の Dahur 語にては učken, ušχin, išiken, itsiken〔八九〕等の語は皆小の意なれば、移地健は蓋し之に近き回鶻語を寫したるものに外ならざる可ければなり、從て舊唐書が「立其少子〔爲〕登利可汗」と記せるものは、「立其移地健〔爲〕登里可汗」と書き換へ、新唐書の記する所と相合せしむるを得るものなりとす〔九〇〕、又舊唐書及び册府元龜に登利可汗と曰ひ、新唐書及び會要に牟羽可汗といふも、登利は可汗の稱號中の二字を取り來れるものなること曰ふ迄も無く、牟羽（Bögü）〔九一〕は其の固有名なるべきを以て、此の相違も何等兩者の同一を疑はしむべきものには非ず。

此の可汗に就きては册府元龜繼襲篇及び唐會要は大曆十四年（七七九年）其の宰相頓莫賀の爲に殺されたりと記し、兩唐書回鶻傳にも代宗死し（代宗の死は本紀に據れば大曆十四年五月なり）德宗新たに立ち、使を回鶻に遣して好を修むるや、可汗は九姓胡の勸に從ひ、唐に入寇せんとし、唐の使節に對して禮を爲さゞりしかば、可汗の從父兄宰相頓莫賀達干は之を諫止せんとせしも志を達せず、遂に可汗を殺して自立するに至れりと記せり、而して新唐書には其翌建中元年に德